



プリズムの瞳

すが、ひろえ
(菅浩江／東京創元社／2007)

現在よりも、医療や科学技術が発達した世界。人間とロボットの共生という御旗の下に、特殊作業や外科手術、工作などの専門に特化された機体として、人型ロボット〈パイ・シリーズ〉が作られた。しかしプロジェクトは題目通りには行かず、その後〈パイ・シリーズ〉は絵を描くだけの無用の存在として各地を放浪することとなる。本作はそんなパイと様々な人々の出会いを描いた短編集である。

感情もなく絵を描くだけのパイの存在意義、そして人型ロボットと人の在りようが、短編と、その間に挟まれた俯瞰者的存在の語りによって次第に明らかにされていく。作品の途中から各編に登場するピンクの服を着た謎の少女と、パイに憎しみを抱き、〈パイ・シリーズ〉中の何でもできる機体である〈プロトタイプ〉の破壊を目論む瘦せぎすの男の存在も、ストーリーを追いかける楽しみを提供してくれている。

「人はパイと出会い、パイは人と出会う。何かが始まるかもしれないし、何も変わらないかもしれない。」

パイは感情を持たないロボットである。淡々と任務を遂行し、人の問いかけにも律儀な言葉遣いで返答する。言葉を字義通り受け取るので、冗談には生真面目に対応するし、嫌みは通じない。そんなパイの姿は時に人の心を苛立たせ、時に人に親愛の情を呼び起こす。恋人との仲を不安に思う女性、平凡な生活を厭い夜遊びに明け暮れる少年、架空の友人を作りだして過ごす少女——彼らはそんなパイに出会い、パイに働きかけ、そしてパイに映る自分の本心に相對する。

また、この本の風景や人物描写は精巧で、想像力をかき立ててやまない。パイの容貌は「ナイロンのてかりを持つ髪」「クレヨンで塗り込めたような透明感の無い肌」などと描写される。特に色彩についての表現は美しい。「吸い込まれるような」という言い回しは、素っ気ない漆黒ではなく、むしろほのかに色味を感じる濃い紺に冠せられる言葉だったのだ」とは夜空の色に対する表現だが、深く感じ入ってしまう。



1. レリクト・クリムゾン
2. クラウディ・グレイ
3. ミッドナイト・ブルー
4. シュガー・ピンク
5. メモラブル・シルバー
6. ミラーリング・ブラック
7. エバー・グリーン
8. トワイライト・パープル
9. サティスファイド・クリア

▲短編のタイトル。色の名前で統一されている。

——パイの虹色の瞳に人々は何を見いだすのか。パイの存在意義とは何か。興味が湧いた方はぜひこの本を手にとって読んでもらいたい。(紫陽)